

三次元形容詞「厚・薄」の多義性研究：プロトタイプ・カテゴリーおよび概念メタファーの視点から

趙, 寅秋

<https://doi.org/10.15017/1470327>

出版情報：地球社会統合科学研究. 1, pp.43-56, 2014-09-10. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：



三次元形容詞「厚・薄」の多義性研究

ープロトタイプ・カテゴリーおよび概念メタファーの視点からー

チョウ
趙

イン シュウ
寅 秋

1. はじめに

1.1 本研究の位置づけ

「厚・薄」、「太・細」などの次元に関わる概念は、「上・下」、「前・後」などの空間関係概念と同様に我々にとって極めて基本的なものである。我々は、しばしば次元概念を通して「感情」、「量」、「密度」などの抽象概念を理解している。抽象概念を理解するための認知プロセスは次元形容詞の多義性に反映されており、その多義性研究は人間の認知プロセスの解明に大いに寄与できる。

しかし、これまで次元形容詞の統語的な特徴や文法的な機能に関する研究、一次元形容詞に注目した言語表現レベル或いは概念レベル¹での多義性を分析する研究はほとんどであるが、言語表現レベルと概念レベルの両方から三次元形容詞²の多義性を考察して対照するものはまだない。そこで本研究では、三次元形容詞「厚・薄」を対象として、『現代日本語書き言葉均衡コーパス中納言』から抽出した例文をデータとし、「厚・薄」の多義性を言語表現レベルと概念レベルという二つの視点から分析して対照する。

1.2 本研究に用いられる理論的枠組み

本研究に用いられる理論は主に次の二つがある。一つ目はプロトタイプ・カテゴリーであり、放射状カテゴリー (radial category) ともいう (Lakoff 1993)。古典的カテゴリー観によると、何かがそのカテゴリーに属すれば必要十分条件を持っていなければならない。しかし、「赤」、「鳥」、「game」などのカテゴリーから見れば、それぞれのカテゴリーに属する成員にはその必要十分条件によってカテゴリー化されているのではなく、家族的類似性によってカテゴリー化されている (Taylor 1989、王 2002、松本 2003、辻 2005、深田・仲本 2008)。さらに、Lakoff (1987) はロッシュが提唱している「プロトタイプ効果」に踏まえ、「放射状カテゴリー (radial category)」を提案し、即ち「ある中心的 (プロトタイプの) メンバーを取り囲むように2次的に周辺の (非プロトタイプの) メンバーが位置づけられ、その2次的なメンバーを中心に

してさらに3次的に周辺のメンバーが位置づけられるというように・結果として・幾重もの円が放射状に弦張していくカテゴリー」である (辻 2005 : 160)。

二つ目は概念メタファーである。伝統的な定義によると、メタファーは「類似性に基づく比喩」であり、Lakoff & Johnson (1986) は「概念メタファー」を提案し、主に「構造のメタファー」、「方向付けのメタファー」、「存在のメタファー」という三種類があると主張している。伝統的なレトリックとは異なり、概念メタファーとは「ある事柄を他の事柄を通して理解し、経験することであると主張している (Lakoff & Johnson 1986 : 6)。また、谷口 (2003) も「メタファーは、言語活動のみならず思考や行動に至るまで、日常生活のすみずみにまで浸透しており、概念体系の大部分がメタファーによって成り立っている」と述べている。

本研究では、多義語としての「厚・薄」を上述の二つの理論に基づき、言語レベルと概念レベルからその多義性を分析して行く。

2. 先行研究

2.1 空間関係概念と言語表現

我々はこの世界に身を置き、多くの物事と関わっている。万物と関わる際にはさまざまな概念が形成されている。Lakoff & Johnson (2004 : 561) は、「概念」に関して次のように述べている。

「概念は身体、脳そして世界の中での経験から出現し、それらを通じて理解される。概念はそれらの意味するところを身体化、特に知覚・運動能力を経由して獲得する。直接身体化されている概念には、ベーシックレベル概念、空間関係概念、身体運動概念 (例えば、手の運動)、アスペクト (つまり行動の出来事の一般構造)、色彩及びその他が含まれる。」

(Lakoff & Johnson 2004 : 561 より)

上述の中の「空間関係概念 (spatial-relations concepts)」について、Lakoff & Johnson (2004) は、人間が直接得

た概念の一つであると主張しており、ベーシックレベル概念と同様に我々にとっては基本的な概念であるという。それゆえ、我々にとって空間関係概念は基本概念の一つであり、他の抽象概念（例えば、時間概念や感情概念など）を理解する基盤である。一方の概念を用いて他方の概念を理解するプロセスは言語表現に反映されており、代表的な言語表現としては「上・下」、「前・後」、「左・右」、「遠・近」などが挙げられる。これらの言語表現の多義性についての分析は、人間が抽象概念を認識するプロセスの解明に大きな役割を果たしている。特にLakoff & Johnson (1986: 18 - 31)をはじめとして、山梨 (2012: 62)、瀬戸 (1995: 210 - 270)、韓 (2008)、金子 (2004)、檜和 (1998)、松井 (2009)などは空間関係概念を反映する言語表現の多義性を概念メタファー、プロトタイプ・カテゴリー、イメージスキーマ³などの視点から詳しく分析した。

2.2 空間関係概念における次元の概念

空間関係概念を反映する多義語として、「上・下」、「前・後」、「左・右」以外に、延長を持つものが空間の一定の量を占めていることを表す次元形容詞（西尾 1982: 69、小出 2000、陸 1989）も挙げられる。形容詞とは客観的な性質・状態の表現あるいは主観的な感覚・感情を表す語であり、属性形容詞、感覚形容詞と感情形容詞に分類することが一般的である（西尾 1972: 21、細川 1993、趙 1979: 299 - 300、呂 1994: 17 - 18、羅 1996: 106）。次元形容詞は従来属性形容詞の下位分類として扱われるものが多い。これまで、次元形容詞に関して様々な研究がなされている。

（一）日本語次元形容詞研究

日本語次元形容詞について、国廣 (1982: 156 - 169) は「長い・短い」、「広い・狭い」、「太い・細い」、「厚い・薄い」、「大きい・小さい」という四つの対である次元形容詞をベクトル性（ある基点からの一方向性）によって正六面体に組み立てることを試みた（図1を参照）。

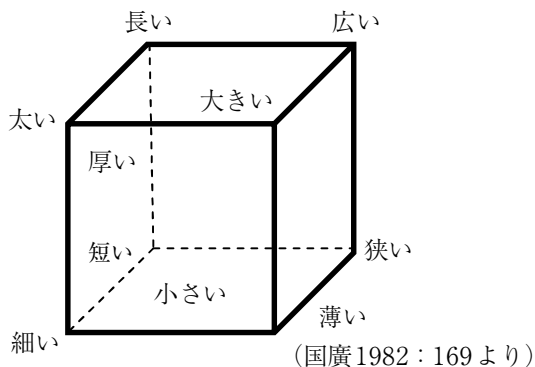


図1 次元形容詞の体系

その後、国廣 (1982) の結果を踏まえ、久島 (1993) は対象の捉え方との関係に基づいて次元形容詞の体系化を試みた。具体的には、表される対象を「もの」と「場所」という二つの視点から捉えることによって、次元形容詞を「もの」系⁴と「場所」系⁵に二分類して体系化した。しかし、国廣 (1982) と久島 (1993) はあくまでも空間的意味を表す次元形容詞を体系化しているだけである。次元形容詞の非空間的意味、例えば「心の隔たりが大きい」、「肝玉が太い」、「情に薄い」などの表現における「大きい」、「太い」、「薄い」は図1が示している関係で体系化できると考えにくい。その他、大里 (1990) は次元形容詞を名詞との共起をまとめた。また、小出 (2000) は次元形容詞が表す対象の特徴からその空間的用法を分析し、空間的用法と対照しながら各形容詞の非空間的な用法をまとめた。劉 (2012) は「広い・狭い」と「太い・細い」の使い分けを認知的な視点から分析して対照した。

（二）中国語次元形容詞の研究

中国語にも次元形容詞の意味記述や共起関係に関する研究がある（陸 1989）が、日本語とは異なり、空間関係概念を反映する多義語として、特に上述の概念メタファーに基づくその多義性研究が行われたものが多く見られる。代表的な研究として、任 (2001a、2001b、2002、2004、2006)、李 (2006) が挙げられる。具体的に言えば次元形容詞を空間関係概念の反映と見なし、空間関係概念領域から抽象概念領域へ拡張するプロセスを中心に体系的な研究が行われた。また、子供が次元形容詞を習得する際の順序とその動機づけを分析する研究とした胡 (2003)、王 (2009) なども挙げられる。

（三）対照研究

日中次元形容詞の対照研究は、趙 (2004)、頼 (2005)、徐 (2010) などが挙げられる。それらの研究は主に言語表現レベルあるいは概念レベルのいずれかに焦点を当て、その多義性を分析したものである。また、趙 (2014a、2014b) は言語表現レベルと概念レベルとの両方から日本語における三次元形容詞「太・細」の多義性を分析し、また中国における類義語「粗・細」との対照も行った。

2.3 先行研究における問題点及び本研究の目的

上述の先行研究を見ると、次のような問題点がある。

①空間関係概念の反映として、日中両言語にとっても空間位置関係を表す名詞や格助詞に注目している。しかし、次元形容詞について名詞や格助詞のように体系的な多義性研究を行うことは少ない。

②中国語次元形容詞に関する認知意味論的な研究は日本語より多く見られているが、意味拡張のプロセスを分析する際に、プロトタイプ・カテゴリーにおける動機付けのメタファー・メトニミー連鎖と概念メタファー・メトニミーを混同している状態である。

③中国語次元形容詞についての研究では、次元形容詞をはじめとして概念メタファーを介して空間関係概念から抽象概念へ写像することについての検証研究は多いが、その概念の抽象程度はかなり混乱している状態である。例えば、「年齢」と「人数」という抽象概念は「量」に属するが、同時に「量」の下位概念とも言える。現状では、「年齢」と「量」を同様なレベルの抽象概念として取り上げる研究が多い。

④次元形容詞の多義性について、特に一次元形容詞（例えば、「深・浅」など）及び三次元形容詞の「大・小」を中心にその多義性研究が行われている。しかしその多義性を研究する際に、言語表現レベルと概念レベルのいずれに焦点を当てる研究がほとんどであるため、

多義性を全面的に分析できていない。

⑤次元形容詞を体系化する試み（国廣 1982、久島 1993）はあるが、あくまでも次元形容詞の空間的な意味しか体系化できないという現状である。

本研究の目的は次の通りである。本研究は、次元形容詞を空間体験から捉える空間関係概念の一種である「次元概念」の反映と見なす。三次元形容詞「厚・薄」を例に、言語表現レベルと概念レベルからその多義性を詳しく分析していく。また、言語表現レベルで現れる特徴と概念レベルでの特徴がどのように関係しているかについて考察する。

3. 研究方法

本研究の具体的な研究方法は次の通りである。

①『日本語書き言葉均衡コーパス中納言』を用いて同様な方法で「厚」と「薄」が含まれた例文⁶をすべて抽出する。そして、抽出例は表1のようにまとめた。

表1 日本語「厚・薄」の抽出例（一部）

厚	薄
最初の頃の木の <u>厚い</u> 板の響きとは異なり、趣がなく、いささか神経にさわる。	超高層マンションの壁が <u>薄い</u> ために生じた誤解のようだ。
物干しざおに汚れ物をひろげる唇が <u>厚く</u> て皮膚の浅黒い女の姿も見えた。	唇は <u>薄く</u> て大きめである。いわゆる美人ではない。
前髪は <u>厚く</u> 残し、目の上ぎりぎりに設定。	彼は、瞼の裏に浮かんだ、髪 <u>の薄い</u> 赤ら顔の男に向かって、フンと鼻を鳴らした。
胸は厚く、肩は広く、なかなかの男ぶりだ。	小麦粉を <u>薄く</u> まぶしてから炒めると、身がくずれません。
しかし、人事の反対の壁は <u>厚かった</u> 。	大部分の畑では土壌が <u>薄く</u> 、地力も低い。
時に尊敬し、時に夢を語り合える <u>厚い</u> 友情の二人です。	味は普通のキュウリに比べ <u>薄く</u> 、もっぱら観賞用という。
このため、どうしても一部の優秀な人材に <u>厚く</u> 報いるようになる。	流し込む前に、型を水で洗い、サラダ油を <u>薄く</u> 塗っておきます。
すべての客を <u>厚く</u> もてなすことに誇りを持っている。	今回は新譜の曲が反応が <u>薄い</u> 。
むしろたいていの研究テーマには、これまでに <u>厚い</u> 研究の蓄積がある。	表情の <u>薄い</u> 、綺麗な顔だけになおさらだ。
同時に <u>厚く</u> 贈物をした。	こうなると、上と下とがパートナーシップで結ばれることが <u>薄い</u> 。
一般に材質の硬いものは薄塗り塗装でも良く、軟らかいものは塗膜を <u>厚塗り</u> して硬さを付与する。	辻は血の気の <u>薄い</u> 頬をいっそう蒼白にしたまま、表情を変えず活字を拾った。
数年前と比べて、優秀な選手層が <u>厚く</u> なった。	江間は運ばれてきた <u>薄い</u> コーヒーを飲みながら、ほっと肩の荷をおろしたような気分になった。
なかなか相手の <u>厚い</u> 守備の壁を破れない。	自分とは無関係な財界人のことだったので関心は <u>薄く</u> 、はっきりとは思いつけない。
高度が徐々に下がり始めると、飛行機は再び <u>厚い</u> 雲の中に入った。	いまだに残る差別意識は、歴史を詳しく学ぶチャンスなかった若者には <u>薄い</u> ようです。
高いコーヒーのほうがり幅が <u>厚い</u> ようにも思うがコストも当然かかっている。	<u>薄く</u> 細い煙が立つその香に花瓶の水をぶちまけた。
収益力が高く、自己資本が <u>厚ければ</u> 、貸出しも増やせる。	<u>薄く</u> 開けた目は恍惚状態を表わしている。
当時の金工職人の職能範囲はそうとう広く、技術の熟練度の層もかなり <u>厚かった</u> のではないかと想像する。	きっと、幸せ <u>薄い</u> 子どもたち、さびしい子どもたちの所から、順番にまわっているんだよ
委員会を代表いたしまして <u>厚く</u> 御礼申し上げます。	元々彼は、死体が曾我孝道という人物である可能性は <u>薄い</u> と思っていた。
面の皮が <u>厚い</u> 、ともいうが。	利幅の <u>薄い</u> 小型車の大量生産で利益を確保するのが狙い。
人望が大変に <u>厚く</u> 、家の召使いたちも大変に多かった。	母親主導の家庭で父親の存在感が <u>薄い</u> 。

- ②データを観察し、意味項目をそれぞれまとめる。
- ③「厚・薄」は言語表現レベルでは、放射状カテゴリーを作成するため、プロトタイプの意味を認定する必要がある。したがって、プロトタイプの意味の認定基準⁷に基づいて「厚・薄」の背景知識⁸を参照しながらそれぞれのプロトタイプの意味を認定する。その後、意味拡張のプロセス、動機づけおよび非対称性を分析する。
- ④次元形容詞の多義を概念レベルから再分類し、概念メタファーの視点からその多義性はどのような概念メタファーによって成り立っているかについて分析する。
- ⑤言語表現レベルで現れる多義性特徴と概念レベルで現れる特徴がどのような関係があるかについて考察する。

4. 「厚・薄」の言語表現レベルにおける多義性

4.1 「厚」の多義性

研究方法②として、「厚」の意味項目を表2のようにまとめた。

表2 「厚」の意味項目

概念	具体的な意味
空間 (プロトタイプの意味)	ものの一方の面から他方の面までの隔たりが大きい (壁、紙、板、門扉など)
	筋肉が発達している様
量	人数などが多い
	利益や恩恵多い
密度	(霧、大気などの)密度が大きい
	(化粧、塗りつけなどが)濃い
程度	感情が深い
	確信する
	世間から受ける評価が非常によい
	保護や優待する
	(攻撃、試合、発達などが)強い
	厚かましい

次に、「厚」のプロトタイプの意味を認定する。抽出例の数と松本(2003、2009)が主張しているプロトタイプの意味認定方法によって、「厚」のプロトタイプの意味は次の四つの背景知識があると挙げられる。

- ①三次元的な物体である。
- ②顕現的な面が二つある(面aと面b)。
- ③面aと面bとの間に隔たり(辺EF)がある。
- ④辺EFは表される物体の標準値⁹以上であるが、最大でも辺CDと辺CEのいずれよりも短い。

これらの背景知識に合致する場合は「厚」のプロト

タイプの意味と見なし、図1のように示しており、具体例は例1のように挙げられる。

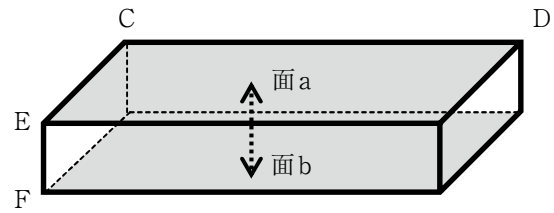


図1 「厚」のプロトタイプの意味

例1

- a. 彼は厚い本をばらばらめくりながら、ひとつひとつの言葉に読みふけり、絵をむさぼった。
- b. 厚焼き玉子昔は、お弁当のおかずの定番だったような気がします。
- c. 水ギョウザには、手作りの厚めの皮が合うみたい。
- d. 下唇のものがすごく分厚い作家が出てくるだけのものじゃない。

上述の背景知識①、②、③のいずれに違反しても「厚」としては成立しない。ただし、条件④に違反する場合は、図2のような二つの場合がある。

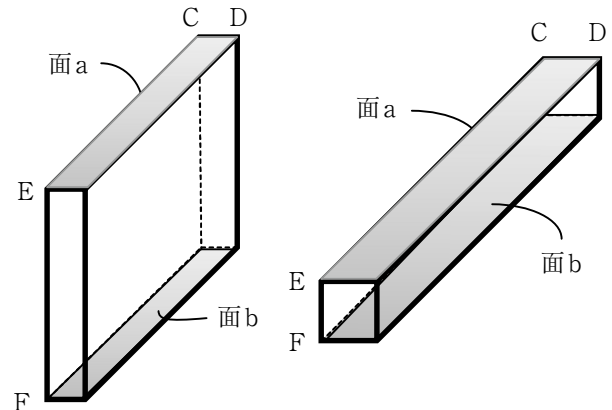


図2 「厚」の条件④を違反する場合

A. 辺EF(面aから面bまでの隔たり)と辺ECの長さが同様の場合、左側の図になる。

この場合、「厚」として扱われることはできるが、顕現的な面は面aと面bではなくなり、見方を変えなければならない。見方を変えない場合、このものは「厚」というよりはむしろ「高」と言った方がよい。

B. 辺EF(面aから面bまでの隔たり)と辺CDの長さが同様の場合、右側の図になる。

この場合、面aと面bは顕現的な面ではなくなる。右側の図からわかるように、図形を構成する四つの長い面の面積はすべて同様であるため、条件②に違反する。この場合、「厚」とは言えず、「太」というようになるだろう。

すなわち、上述の背景知識に合致する場合に使用されている「厚」は「プロトタイプの意味」といえる(例1を参

照)。

次に、「厚」の多義を拡張のプロセス、関連付けとの面から分析する。

(一) 拡張の意味<筋肉が発達している様>

例2

- a. 胸は厚く、肩は広く、なかなかの男ぶりだ。
- b. 私は胸板が特に鍛えてもないのにめちゃくちゃ厚いのが悩みです。

例2の「厚」は男性の胸郭を取り囲む筋肉が発達しているという意味を表す。筋肉は骨格に付着しているため、表面から裏面までの隔たりが見えないが、人間は三次元的に一定の厚みを持っているため、拡張の意味<筋肉が発達している様>はメタファーを介し、プロトタイプの意味から意味拡張したものである。

(二) 拡張の意味<人数が多い>

拡張の意味<利益や恩恵多い>

例3

- a. 数年前と比べて、優秀な選手層が厚くなった。
- b. 高いコーヒーのほうがり幅が厚いようにも思うがコストも当然かかっている。

例3aの「厚」は人数が多いという意味であり、bは利益が多いことを表す。人数の場合、個々の人によって構成される全体に注目し、厚みのあるものとして主観的に扱われる傾向がある。この場合、具体的な事物としての顕現的な面のイメージが希薄化したが、一方の面から他方の面までの隔たりが大きいというイメージは引き継がれている。すなわち、数量の増加は物理的な厚みと共起性(隣接性)があるため、拡張の意味<人数が多い>はプロトタイプの意味からメトニミーを介して意味拡張したものであると考えられる。次の<利益や恩恵が多い>という拡張の意味も同様に、量の増加と物理的な厚みとの隣接性に基づき、メトニミーを介してプロトタイプの意味から意味拡張したものである(図3を参照)。

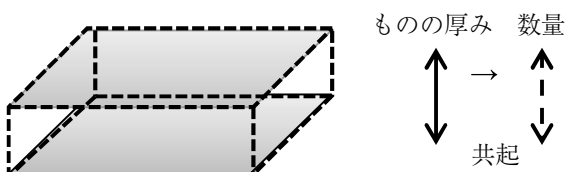


図3 量を表す「厚」

(三) 拡張の意味<(霧、大気などの)密度が大きい>

拡張の意味<(化粧、塗りつけなどが)濃い>

例4

- a. 高度が徐々に下がり始めると、飛行機は再び厚い雲の中に入った。
- b. 遠くには、このあたり特有の厚い霧がかかっている。
- c. その女は厚く化粧をして、ほれほれするような服装をしていた。

例4の「厚」は気体などの密度が高いという意味を表している。先述の人数などとは異なり、一定の範囲内における気体などのものは、区切ることが難しい一貫性の強いものである。一定の範囲内にその気体の量が増加すれば、密度も大きくなる(図4を参照)。

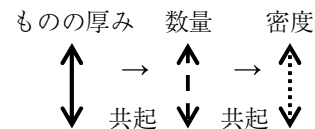


図4 ものの密度を表す「厚」

そのため、拡張の意味<(霧、大気などの)気体の密度が大きい>は<人数が多い>という意味から拡張したものであると考えられる。例4cの「厚」は化粧が濃いという意味である。化粧や塗りつけは積み重ねることができるものとして認識され、量が大きくなると自然に厚くなる。そのため、拡張の意味<(化粧、塗りつけなどが)濃い>は拡張の意味<(霧、大気などの)密度が大きい>からメトニミーを介して意味拡張したものである。

(四) 拡張の意味<感情が深い>

拡張の意味<確信する>

拡張の意味<世間から受ける評価が非常によい>

拡張の意味<保護や優待する>

拡張の意味<(攻撃、試合などが)強い>

例5

- a. 時に尊敬し、時に夢を語り合える厚い友情の二人です。
- b. それが厚い信頼をつくりだし、人間同士の連帯と安心をただよわせているのです。
- c. 人望が大変に厚く、家の召使いたちも大変に多かった。
- d. すべての客を厚くもてなすことに誇りを持っている。

e. 続いてマルちゃんとヴィドゥカの2枚代えで、一気に攻撃を厚くした。

例5aの「厚」は感情が深いという意味であり、bは確信する様子を表している。また、cは世間から評価されている意味で、dは他人を保護する、或いは優遇することを表す。感情は、利益や恩恵と同様、形がないものである。感情という抽象物は積み重ねる特徴（時間的な持続性という特徴）を持っているため、厚みがあるもののように捉えられるのが一般的である。そのため、拡張的意味＜感情が深い＞はプロトタイプの意味からメタファーを介して意味拡張したものだと考えられる。また、拡張的意味＜確信する＞、＜世間から受ける評価が非常によい＞、＜保護や優待する＞は＜感情が深い＞という意味の下位分類と見なしてよいいため、メトニミーを介して＜感情が深い＞という意味から拡張したものであると考えられる。

例5eの「厚」は「攻撃や試合での勢力が強い」という意味を表している。攻撃の際に、攻撃の回数や人数、また、武器の数量が多ければ、その攻撃で現れる力が強いという認識は一般的である。そのため、拡張的意味＜（攻撃、試合などが）強い＞は、数量が増加すれば程度が大きくなるという共起性に基づいて、＜人数などが多い＞とい

う意味から拡張したものであると考えられる。

（五）拡張的意味＜厚かましい＞

例6

- a. そうした日常のかけひきに慣れるためには、かなり面の皮が厚く、よほど立ち回りがうまくなくては行けない。
- b. 面の皮が厚い野郎だ。

例6のように、「厚」は「厚かましい」という意味を表す場合に、ほとんど「面の皮」と共起している。「面の皮」は「行動や態度」を指しており、その行動や態度の慎みがない場合、言い換えればその慎みがない程度が大きい場合は「厚」によって表す。そのため、拡張的意味＜厚かましい＞は実際に「面の皮が厚い」という表現全体の拡張的意味であり、具象的なものが厚みを持っているように、行動や態度の慎みがない場合は「面の皮が厚い」という表現によって比喩的に表すことができる。そのため、拡張的意味＜厚かましい＞はプロトタイプの意味からメタファーを介して意味拡張したものであると考えられる。

最後に、上述の分析に基づき、「厚」の意味拡張のプロセスと動機づけを図5の意味ネットワークの通りに纏

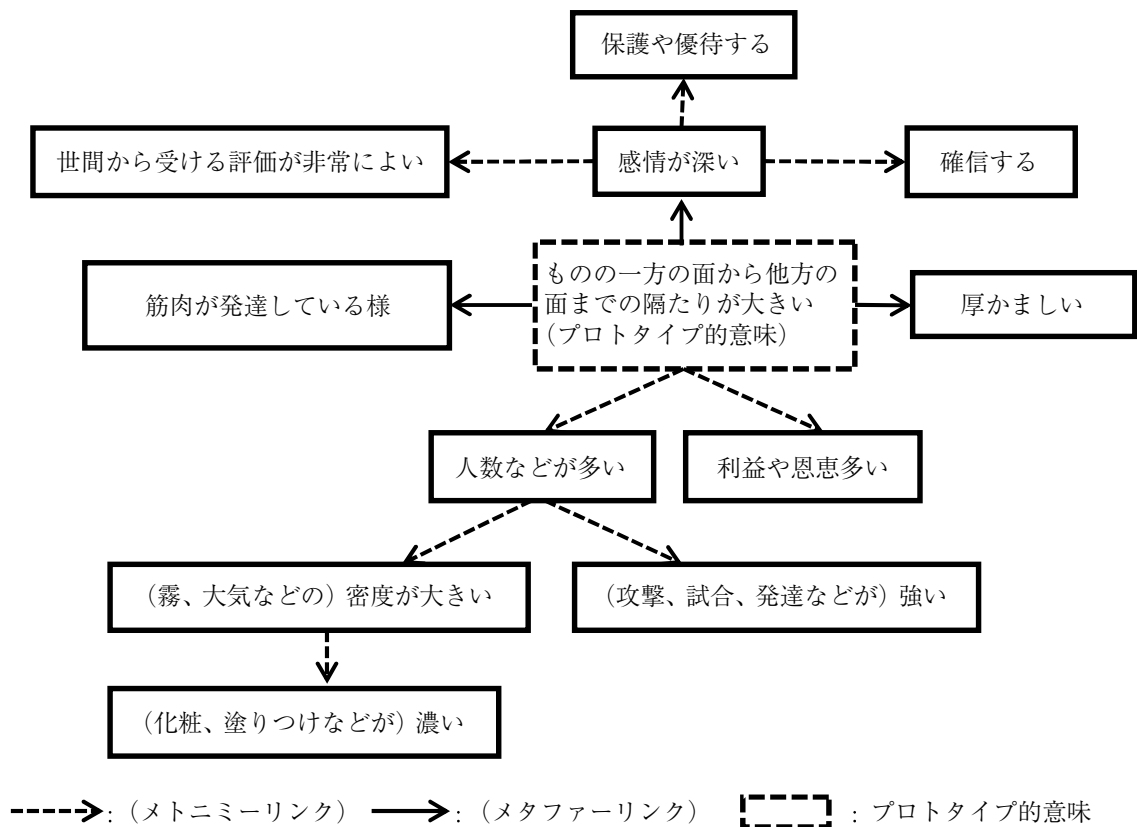


図5 「厚」の意味ネットワーク

める。

4.2「薄」のプロトタイプの意味

「厚」と同様に、「薄」の意味項目を表3のようにまとめた。

表3 「薄」の意味項目

概念	具体的な意味
空間 (プロトタイプの意味)	物の一方の面から他方の面までの隔たりが小さい (壁、紙、板、門扉など)
量	人数などが少ない 利益や恩恵が少ない
密度	(霧、大気などの) 密度が小さい (化粧、塗りつけなどが) 薄い 味覚、嗅覚、視覚という感覚が強くない
程度	表情や動作の幅が小さい 反応や関心などが少ない (意識、観念などの) 認識レベルが低い 物事の傾向が明らかでない (可能性、実現性、信ぴょう性など) 感情が浅い 確信しない 関係があまりない 状態存在感が希薄だ (攻撃、試合、影響などが) 弱い

その次に、「薄」の背景知識は次のような項目が挙げられる。

- ①三次元的な物体である。
- ②顕現的な面が二つある (重ねる場合も認める)。
- ③辺EFは表される物体の標準値以下である (ゼロになれる)。

これらの背景知識に合致する場合は「薄」のプロトタイプの意味と見なし、図6のように示しており、具体例は例7のように挙げられる。

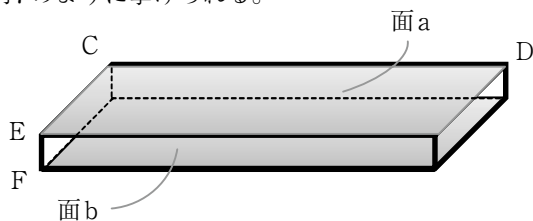


図6 「薄」のプロトタイプの意味

「薄」のプロトタイプの意味は<物の一方の面から他方の面までの隔たりが小さい (壁、紙、板、門扉など)>である (例7を参照) と認定した。

例7

- a. 糸でカバーを編み、中にウレタンを入れた薄い座布団。

- b. 薄い唇の端を上げて、彼は苦笑しているのかもしれない。
- c. (ペピーノの) 皮が薄く、メロンと洋ナシを合わせたような風味。
- d. バナナを薄くスライスした物をのせてシナモン振って食べても美味しいよ！

次に、「薄」の多義を拡張のプロセス、動機付けの面から分析する。

- (一) 拡張の意味<人数などが少ない>
拡張の意味<利益や恩恵が少ない>

例8

- a. 持続的に思索を深めるタイプの建築家の層が極めて薄いことである。
- b. よほど観音のご利益が薄かったのではないか。

例8aの「薄」は建築家の数が少ないという意味を表し、bは利益が少ないという意味を表す。対義語としての「厚」と同様にプロトタイプの意味からメトニミーを介して意味拡張したものである。

- (二) 拡張の意味<(霧、大気などの) 密度が小さい>
拡張の意味<(化粧、塗りつけなどが) 薄い>
拡張の意味<味覚、嗅覚、視覚という感覚が強くない>

例9

- a. 薄く細い煙が立つその香に花瓶の水をぶちまけた。
- b. 流し込む前に、型を水で洗い、サラダ油を薄く塗っておきます。
- c. 「違う。リエコはいないんだよ」 ボブはじれったさうにいうと、薄いコーヒーをがぶりと飲んだ。

例9aの「薄」は密度や濃度が小さいという意味を表している。「厚」と同様に、一定の領域におけるものの量が少なければ、その密度も小さい。そのため、拡張の意味<(霧、大気などの) 密度が小さい>は、メトニミーを介してプロトタイプの意味から拡張したものであると考えられる。例9 bの「薄」は拡張の意味<(化粧、塗りつけなどが) 薄い>を表し、「厚」と同様には<(霧、大気などの) 密度が小さい>という意味からメトニミーを介して意味拡張したものである。cの「薄」は「コーヒーの味が薄い」という意味を表す。cと同様に、強く感じられない場合は「薄」が使用できる (例10を参照)。

例10

- a. 冬になっても葉の落ちない山林の緑も薄い。
- b. 暗闇の外灯がボーと薄く光りながら後ろに流れてゆく。
- c. 年を取ると体臭って薄くなるのね。

例9cと例10が示しているように、「薄」は五感に属する味覚、嗅覚、視覚という感覚が強くないことを表す場合に用いられる。味、匂い、光や色を「薄」で表される場合は、一定の範囲内で量が少ない、すなわち密度が小さいという意味が含まれている。密度の小さいものは感知されにくいという特徴もある。そのため、拡張的意味<味覚、嗅覚、視覚という感覚が強くない>は<(霧、大気などの)密度が小さい>という意味からメトニミーを介して拡張したものであると考えられる。

(三) 拡張的意味<表情や動作の幅が小さい>

- 拡張的意味<反応や関心などが少ない>
- 拡張的意味<(意識、観念などの)認識レベルが低い>
- 拡張的意味<物事の傾向が明らかでない(可能性、実現性、信ぴょう性など)>
- 拡張的意味<感情が浅い>
- 拡張的意味<確信しない>
- 拡張的意味<関係があまりない>
- 拡張的意味<存在感が希薄だ>
- 拡張的意味<(攻撃、試合、影響などが)弱い>

例11

- a. 薄く開けた目は恍惚状態を表わしている。
- b. 自分とは無関係な財界人のことだったので関心は薄く、はっきりとは思い出せない。
- c. 被災を体験したことがない私たちはどうしても危機管理意識が薄くなりがちです。
- d. 恋愛の可能性は年々薄くなっている。
- e. 重いのは、あなたの相手に対する愛情が薄いからですよ。
- f. 学生の相互に信頼感が薄いこと。
- g. あなたには縁が薄くても、ご主人にとっては実のお祖父さまですからね。
- h. 円谷君はどちらかというと、影が薄かったようです。
- i. 比較的防御の薄い発電所南側の壁に、戦車三両を並べて前進した

例11aの「薄」は目を少し開けている状態を表す。例

文から分かるように、目を少し開く際に瞼の間にある隔たりは大きく開く時より短く、薄い物体の顕現的な両面の間にある隔たりと類似しているため、拡張的意味<表情や動作の幅が小さい>はメタファーを介してプロトタイプの意味から意味拡張したものである。また、例10b、c、d、e、f、g、hの「薄」はそれぞれ<反応や関心などが明らかでない>、<(意識、観念などの)認識レベルが低い>、<物事の傾向が明らかでない(可能性、実現性、信憑性など)>、<感情が浅い>、<確信しない>、<関係があまりない>、<存在感が希薄だ>という拡張的意味を表している。観念、意識、または可能性や信憑性などの抽象物が具象的なものとして扱われ、具象的なものは一定の範囲内で量が少なければ密度が小さくなり、また淡くなることと同様に抽象物の量が少なければ不明確になるため、拡張的意味<反応や関心などが明らかでない>、<(意識、観念などの)認識レベルが低い>、<物事の傾向が明らかでない(可能性、実現性、信憑性など)>はそれぞれ<(霧、大気などの)密度が小さい>という意味からメタファーを介して意味拡張したものである。また、拡張的意味<感情が浅い>は「厚」と同様に、プロトタイプの意味からメタファーを介し意味拡張され、更に下位分類である<確信しない>、<関係があまりない>、<存在感が希薄だ>という意味はそれぞれメトニミーを介して意味拡張したものであると考えられる。

最後に、例11iの「薄」は攻撃の程度が低くて弱いという意味である。「厚」と同様に、<人数が少ない>という意味からメトニミーを介して意味拡張したものである。

上述の分析に基づき、「薄」の意味ネットワークを図7のように纏めた。

5. 「厚」と「薄」の言語表現レベルの多義性の対照

三次元形容詞「厚」、「薄」の意味ネットワーク(図5および図7)から分かるように、意味拡張する際に、メトニミーによって動機付けられるものはメタファーによって動機付けられるものより多い。Lakoff(1986)は、「上・下」という概念を介し、方向付けのメタファーが存在するという前提に基づき、多くの抽象概念を理解するプロセスを解明した。個々の言語表現は「上・下」などの方向位置を表す語を用いて表すことは、その言語表現が表す概念と方向性との間に共起性に基づいているからである。そのため、言語表現レベルではメトニミーによって動機付けられることが多い。その一方で、拡張的意味から見ると、「厚」より「薄」の方ははるかに多く、いわゆ

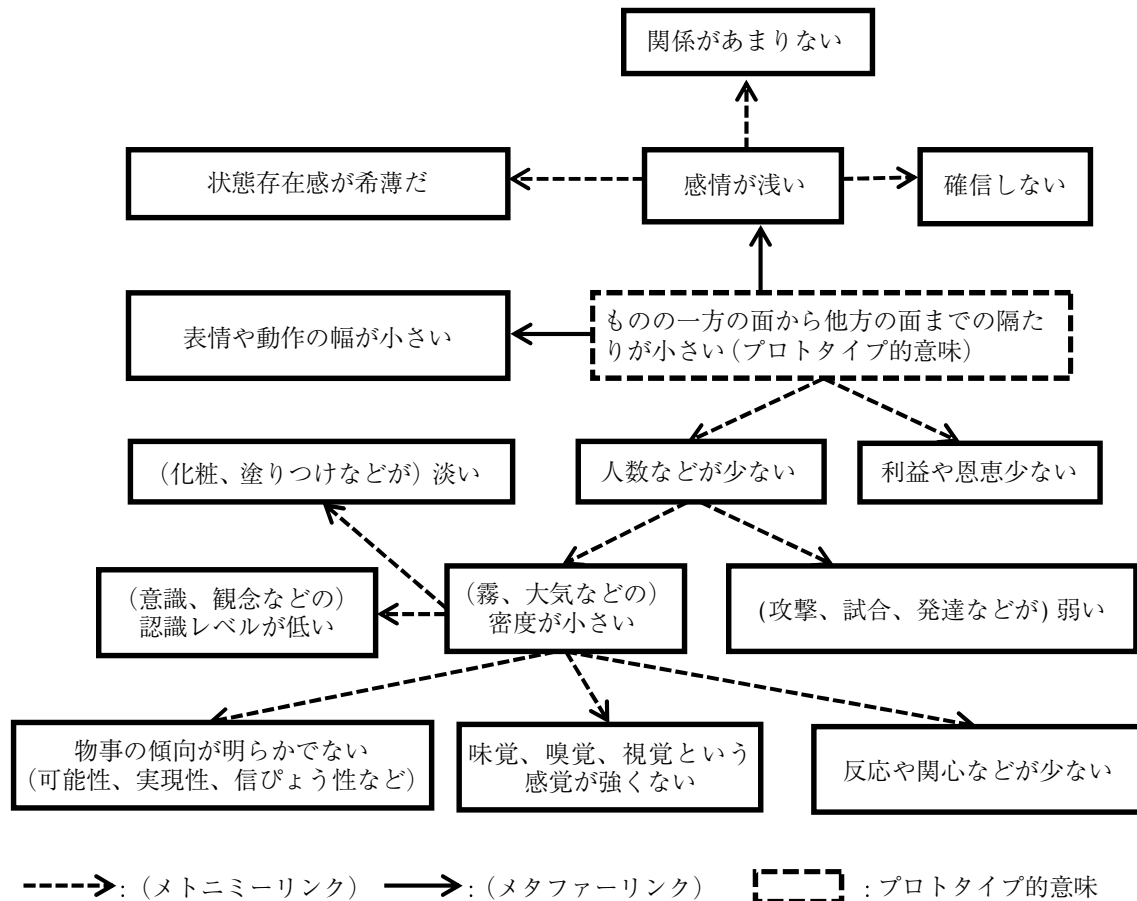


図7 「薄」の意味ネットワーク

る非対称性が見られた。その非対称性が存在する理由を次のように分析する。まず、4節ですでに挙げた「厚」と「薄」が成り立つ背景知識を表4のように再び挙げる。

先述の図1と図6が示しているように、プロトタイプの意味から見ると「厚」と「薄」とは対称的であるが、表4から見ると、「厚」と「薄」を認識する際に我々が持つ背景知識はかなり対称的ではないと言える。そうすると、プロトタイプの意味が対称的であっても、意味拡張する度に活性化された背景知識も食い違うようになる。そのため、拡張の意味には非対称性が生じることは当然のことであると言える。

表4 「厚・薄」という概念を成り立つ背景知識

「厚」の背景知識	「薄」の背景知識
①三次元的な物事である	①三次元的な物事である
②顕現的な面が二つある	②顕現的な面が二つある(一つになる場合もある)
③面aと面bとの間に隔たり(辺EF)がある	③面aと面bとの間に隔たり(辺EF)は標準値以下である(辺EFがゼロになれる)
④辺EFは表されるものの標準値以上であるが、最大でも辺CDと辺CEのいずれよりも短い	

また、「厚・薄」によって表される物事の特徴にも関係

があると考えられる。

例12

- a. 可能性が薄い。／×可能性が厚い。
- b. 意識が薄い。／×意識が厚い。
- c. 光が薄い。／×光が厚い。
- d. つながりが薄い。／×つながりが厚い。(×が付いている文が使用できない)

例12から見ると、「薄」が使用できるが、対義語として「厚」は使用できない。可能性、意識、光や繋がりは抽象物であるため、本来形がないものである。我々はこれらの抽象物を捉える際にそれに一定の次元を付与して捉えることが多い。可能性、意識、光や繋がりが少ない場合は、具体的なもののようになり、または小さくなって最後には消えるという結果になるのが一般的であるが、多い、或いは強い場合は形に関する印象は漠然的になり、必ずしも厚くならない。言い換えれば、マイナスの次元方向(例えば「薄」、「小」、「細」)になると、統一性や曖昧性が強くなるのに対し、プラスの次元方向(例えば「厚」、「大」、「太」、「広」)になると、制限が多くなり、次元性もより明確的に反映されるようになる。

6. 概念レベルから見る「厚・薄」の多義性

前節までで、言語表現レベルでの「厚・薄」の多義性を分析した。本節では、概念レベルから見て「厚」と「薄」の多義性はどのような特徴があるか、言語表現レベルの特徴とどのような関係があるかという点について考えてみたい。まず、「厚」と「薄」のすべての意味をそれが属する概念によって分類すると、いずれも＜空間＞、＜量＞、＜密度＞、＜程度＞という四つの概念領域に入れ込むことができる(表2と表3を参照)。そうすると、「厚・薄」の言語表現レベルで現れた非対称性とは異なり、概念レベルでは次元概念から他の抽象概念へ拡張するということが両方とも対称的であるのではないかと考えられる。

それで、次元づけのメタファーが存在することを前提にして、次のような概念メタファーが挙げられる。

＜数量が多いのは厚い、数量が少ないのは薄い＞

- ①数年前と比べて、優秀な選手層が厚くなった。
- ②持続的に思索を深めるタイプの建築家の層が極めて薄いことである。

＜利益や恩恵が多いのは厚い、利益や恩恵が少ないのは薄い＞

- ①同時に厚く贈物をした。
- ②利幅の薄い小型車の大量生産で利益を確保するのが狙い。

＜密度が大きいのは厚い、密度が小さいのは薄い＞

- ①高度が徐々に下がり始めると、飛行機は再び厚い雲の中に入った。
- ②暗闇の外灯がポーと薄く光りながら後ろに流れてゆく。

＜程度が深いのは厚い、程度が浅いのは薄い＞

- ①すべての客を厚くもてなすことに誇りを持っている。
- ②あなたには縁が薄くても、ご主人にとっては実のお祖父さまですからね。(= 8a)

上述の概念メタファーによって、言語表現では非対称的な表現が、実は概念レベルから見ると同じ概念メタファーによって成り立っており、かなり対称的であると言える。

7. 終わりに

本研究は三次元形容詞「厚・薄」の多義性を言語表現レ

ベルと概念レベルから分析した。「厚・薄」は空間関係概念の一種である次元概念の反映として、抽象概念を理解する際に大きな役割を果たしている。「厚・薄」を用いて抽象概念を理解するプロセスはその多義性に反映されている。分析結果によると、「厚・薄」の複数の意味は言語表現レベルでかなり非対称的であるが、概念レベルでは次元づけのメタファーによって成り立っているということが解明され、概念上では対称性が示されていることが分かった。他の三次元形容詞の多義性が「厚・薄」のような特徴を持っているか、また「厚・薄」とどのような関連を持つかについての考察は、今後の課題としたい。

注

1. 言語表現レベルと概念レベル：言語表現レベルとは日常で用いられる具体的な言語表現のこと。概念レベルとは概念メタファーによって写像された概念領域のことである。
2. 三次元形容詞：本研究における次元形容詞を一次元、二次元、三次元と三分類する。一次元形容詞とは、線的な特徴を持つ語である(「高・低」、「長・短」、「深・浅」)。それと同様に、二次元形容詞は二次元的な面を持つものを修飾する語であり(「広・狭」、「遠・近」)、三次元形容詞は立体的なものを修飾する語である(「太・細」、「厚・薄」、「大・小」)。
3. イメージスキーマ：山梨(1997)、辻(2005)を参照する。
4. 「もの」系：「もの」として捉えるものは独立した対象であり、立体的な形をして、移動可能である。これらの対象を表す次元形容詞を「もの」系といい、「大小」、「長短」、「太細」、「厚薄」が挙げられる(久島2003)。
5. 「場所」系：「場所」として捉えるものは独立した対象ではなく、地面に属するもので、単独では立体的な形をなさなく、移動不可能である。これらの対象を表す次元形容詞を「場所」系といい、「高低」、「深淺」、「広狭」、「遠近」が挙げられる(久島2003)。
6. 本研究に抽出された例文の基準は次の通りである。抽出された例文には独立的な内容語(例えば、「太い」、「細い」、「太く」、「細く」、「太かった」、「細かった」など)として用いられるものと、語根と複合し複合語(例えば、「太っ腹」、「細腕」、「骨太」など)になるものがあるため、本研究では、物事を修飾する機能がある限り、研究対象とみなす。ただし、「太る」のような動詞の性質を持つ語は明らかに形容詞のカテゴリーに属しないため、本研究の研究対象から外す。
7. 松本(2003、2009)は、「多義語の複数の意味のうち、用法上制約がない、あるいは制約が相対的に少ない意味をプロトタイプの意味と認定する」と主張している。

具体的には、①文字通りの意味である、②関連する他の意味を理解する上での前提となる、③具体性（身体性）を持つ、④認知されやすい、⑤使用頻度が高い、⑥用法上の制約を受けにくい、という基準を提示している。

8. 背景知識：認知言語学では「認知領域」、「認知モデル」ともいう。ある物事に関するすべての関連知識のことである。百科事典の意味ともいう。
9. 標準値：同種類の物体の平均的な値のことである。

参考文献

- Lakoff, G. and Johnson, M (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 (訳) 1986 『レトリックと人生』大修館書店)
- Lakoff, G. and Johnson, M (1999) *Philosophy in the flesh, the embodied mind and its challenge to western thought*, Basic Books (計見一雄 (訳) 2004 『肉中の哲学—肉体を具有したマインドが西洋の思考に挑戦する』哲学書房)
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. University of Chicago Press (池上嘉彦・河上誓作 (訳) 1993 『認知意味論：言語から見た人間の心』紀伊國屋書店)
- Taylor, J.R (1989) *Linguistic Categorization Third Edition Prototypes in Linguistic Theory*, Oxford University Press (辻幸夫・鍋島弘治朗・篠原俊吾・菅井三実 (訳) 2008 『認知言語学のための14章 第三版』紀伊國屋書店)
- 初山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』研究社
- 辻幸夫 (2005) 『認知言語学への招待』大修館書店
- 山梨正明 (1997) 『言葉の認知空間』紀伊國屋書店
- (2012) 『認知意味論研究』研究社
- 深田智・仲本康一郎 (2008) 『概念化と意味の世界』研究社
- 松井真人 (2009) 「英語と日本語における〈右〉と〈左〉に関する語彙の意味拡張について」『山形県立米沢女子短期大学紀要』45 pp.65 - 73
- 瀬戸賢一 (1995) 『空間のレトリック』海鳴社
- 松本曜 (2003) 『認知意味論』大修館書店
- (2009) 「多義語における中心的意味とその典型性：概念的の中心性と機能的中心性」『Sopp.hia linguistica』57 pp.89 - 99
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所 秀英出版
- 細川英雄 (1993) 「形容詞の主観性について—対象内容による形容詞の分類とその位置づけ」『早稲田日本語研究』1 pp.78 - 65
- 森田良行 (1980) 「日本語の形容詞について」『講座日本語教育』16 pp.108 - 124
- 小出慶一 (2000) 「次元形容詞の空間的用法と非空間的用法」『群馬県立女子大学紀要』21 pp.1-13
- 国廣哲弥 (1982) 『意味論の方法』大修館書店
- 久島茂 (2003) 『「もの」と「場所」の意味論』くろしお出版社
- 谷口一美 (2003) 『認知意味論の新展開』研究社
- 大里泰弘 (1990) 「日本語次元形容詞に関する報告」『長崎ウエスレヤン短期大学紀要』13 pp.28 - 39
- 金子倫子 (2004) 「上下・前後・左右—身体の方角性とその意味拡張をめぐる一考察」『日本認知言語学会論文集』4 pp.370 - 379
- 劉笑倩 (2012) 「視点の違いによる次元形容詞の使い分け—『広い・狭い』と『太い・細い』」『日本認知言語学会論文集』12 pp.324 - 335
- 頼錦雀 (2005) 『日本語次元形容詞研究』致良出版社
- 植和千春 (1998) 「方向認識の非対称性とことばの意味の拡張—『まえ』を中心に」『言葉と文化』2 pp.94 - 116
- 韓濤 (2008) 「中国語空間辞“上”の意味拡張及びその動機付け」『杏林大学大学院国際協力研究科 大学院論文集』5 pp.67 - 92
- 徐蓮 (2010) 「日本語の『深』と中国語の“深”における認知的対照研究」『大学院教育改革支援プログラム『日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成』活動報告書』pp.130 - 134
- 趙寅秋 (2014) 「日本語三次元形容詞『太・細』の多義性研究」『東アジア日本語・日本文化研究』17 pp.13 - 26
- (2014) 「中国語における次元形容詞〈粗・細〉の意味拡張について—日本語における次元形容詞『太・細』の対照を兼ねて」『日語教育と日本学研究—大学日語教育研究国際研究会論文集』pp.260 - 265
- 王寅 (2002) 『認知言語学』上海外语教育出版社
- 趙元任 (1979) 『現代漢語口語語法』商務印書館
- 呂叔湘 (1994) 『現代漢語八百詞』商務印書館
- 羅安源 (1996) 『簡明現代漢語語法』中央民族大学出版社
- 王莉 (2009) 「3-5 歳兒童空間維度詞“大小”的認知研究」上海師範大學碩士畢業論文
- 陸儉明 (1989) 「說量度形容詞」『語言教學與研究』3 pp.46 - 59
- 任永軍 (2006) 「直線型空間維度詞的隱喻義認知分析」『聊城大學學報 (社會科學版)』3 pp.72 - 75

- (2002)“空间维度词粗细的认知语义分析”《聊城大学学报(哲学社会科学版)》3 pp.113 - 116
- (2001)“空间维度词“高、低(矮)”的认知语义分析”《聊城师范学院学报(社会科学版)》2 pp.123 - 125
- (2004)“空间维度词“大、小”的认知语义分析”《聊城大学学报(社会科学版)》5 pp.30-33
- 任永军 滕向农(2001)“空间维度词“深、浅”的认知语义分析”《柳州师专学报》16(4) pp.23 - 26
- 李军 任永军(2006)“空间维度词“大”“小”的隐喻义认知分析”《中国海洋大学学报(社会科学版)》4 pp.58 - 62
- 金美顺(2009)‘空间形容词“深”的研究’北京语言大学博士学位论文
- 胡德明(2003)‘儿童空间维度形容词发展顺序的理论解释’《世界汉语教学》3 pp.61 - 66

study on the polysemy of the dimensional adjectives *kou-haku*: Focusing on prototype category and metaphor

Yinqiu ZHAO

Similarly to the spatial concept of “up” and “down” or “before” and “after” , the dimension concept is also basic for us. We understand the abstract concepts of “emotion” , “quantity” and “density” through the dimension concept. The cognitive processes which lead to the understanding of abstract concepts are reflected in the polysemy of dimensional adjectives, so the study on the polysemy of dimensional adjectives can contribute greatly to the understanding of these cognitive processes in humans. However, so far most studies of dimensional adjectives focused on syntax, grammar, or on the polysemy of one-dimensional adjectives at the linguistic expression level or at the conceptual level. In this study, we focus on the Japanese dimensional adjectives *kou-haku*, and we analyze their polysemy both on the level of linguistic expression and on the conceptual level. The results are as follows. First, at the linguistic expression level, expansive meanings of *kou* and *haku* are quite asymmetric. One reason for this is that the parts of background knowledge which activate during the extension of meaning are different; the other reason is that the characteristics of the relevant object itself result in the asymmetry of language performance. But despite the fact that they are asymmetrical at the level of linguistic expression, “kou” and “haku” are derived from the same conceptual metaphor, so it can be said they are symmetrical on the conceptual level.